

伝統家具の試作研究

— シューカー家具 (Ⅲ) —

上原守峰

アメリカ東部地方に最盛期19カ所5,200人いたシューカー教徒は、現在わずか2カ所に婦人8人を残し途断えようとしている。

彼らのコミュニティで創り出された家具工芸品類は、装飾を排した簡素で機能的なデザインなので現代感覚に通じる部分を数多く持っている。

そこで、当試では5カ年計画で無数にある彼らの家具の中から美しく機能的なものを選び出し、寸法を日本人の生活に合わせて復元している。

1. はじめに

本県における家具工芸品材料の主体は屋久杉であるが、良質材の供給難、伐採量の減少等を考えると、他樹種の活用も将来に向けて積極的に図る必要がある。

しかし、知名度があり歪さえ良ければ売れた屋久杉と異なり、地域性が薄く個性のない素材を活用するには技術やデザインが重要なファクターになるなど諸問題がある。

一方、生活の洋風化、本物志向に伴い本格的な洋家具へのニーズが消費者側にある。生活に密着した長期間の使用に耐える洋家具の開発が望まれているのである。

そのためには、様式が確立し長い間世界中の人から愛され続けてきた伝統家具からプロポーション、素材の使い方、加工技術、構造、思想等を学びとっていかなければならない。

そこで、アメリカの伝統家具として人気が高く、研究書籍も多いシューカー家具を復元することにした。

2. 概 要

(1) 復元の目的

- ・日本式のシューカー家具を育て製造販売する
- ・民芸家具製作における基盤づくりの資料を得る

(2) 復元時の注意事項

アメリカでは復元されたものが骨董市場に出回ることがあり、不当な販売もなされている。日本では製造メーカーも少なくそのような例はないが、原物と区別するため製作者名と製作年代を裏にほりこむ。

(3) 復元する家具のコミュニティと年代

- ・ニューレバノン

シューカー家具といっても長期間各地のコミュニティで作られたモノは、素朴なものから美しいプロポーションをもったものまで実に多彩である。家具づくりの中心

がレバノンであり、ここから他の地域に技術が波及していったことや美しく機能的なモノが多いことを考慮すると、復元するにはこの地域が適当である。

・1830年代

家具の様式的完成は1830年頃であり、それ以前には伝統的スタイルをとっている。又、1800年代後半以降では彼らの教義に反し装飾を加えたものがつくられている。

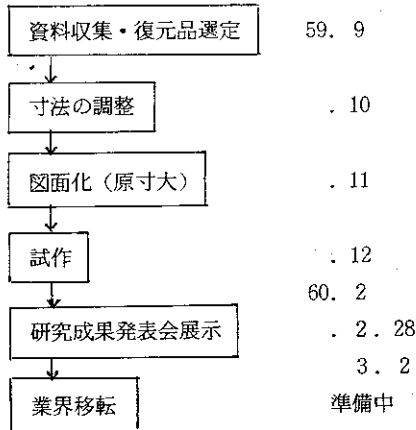
(4) シューカー教徒の略歴と現在

1774年にアン・リーに率いられた10人程度のシューカー教徒(キリスト教の一派)が、イギリスから東海岸に移住した。彼らは一般世間から離れて、自分達だけで独身の共同生活を送った。戒律はきびしく、虚飾を排してひたすらに「心は神に、手は仕事に」をモットーに、地上に天国を作り出そうとした。敷地や建物、家具や小物、衣服に至るまでこの考え方に従って作られた。特に家具は、その機能的性、均整、材質の生かし方など20世紀デザインを100年以上も先取りしたものとして注目をあびている。彼らの教勢の最盛期1850年には19カ所のコミュニティに5,200人の教徒を数えているが、現在は婦人のみ8人になっている。

(5) 過去の復元情況

59年度	スツール	2種6点
	コーヒータブル	1種6点
60年度	ベンチ	1点
	キャンドルボックス	1点
	ダイニングチェア	1種6点

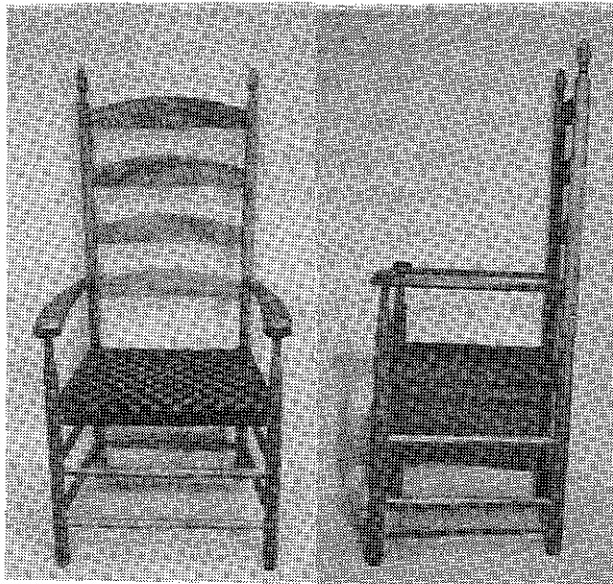
(6) 復元のフローチャート



(7) オリジナルの寸法調整

18世紀の初期、ニューレバノンのコミュニティーで Sister Lillianによって作られたものを原型にした。背板を3枚から4枚に、座面の高さを464mmから430mmに寸法調整した。なお、全体のプロポーションを損なわないよう座面高さの縮小率である7%を基準にし寸法を縮小した。ただし、板厚だけは原型通りに試作した。

- ・寸法：550（幅）× 442（奥行）× 1,117（高さ）
- ・材料：ケヤキ、ミズメザクラ、アクリルテープ、ナラ、ウレタンフォーム
- ・塗装：オイルフィニッシュ



3. まとめ

スツールから背板が1枚あるダイニングチェア、そして本年度試作のアーム付ハイバックチェアへと進んできた。この椅子を作るには、様々な仕事及要求される。長さ1,117mm、直径35mmの後脚にみられる長尺材の旋盤加工、フィニアルの挽物加工、860Rの曲率をもった背板の曲げ、台形82°と98°、横貫と背板の角度112°における穿孔、1インチ幅のアクリルテープで台形の座面を左右対象に構成する編みこみ、上部に向かってわずかに広がりのある後脚に対する4枚の背板、前脚と後脚とをつなぐアームの内寸加工、接合部における丸穴と丸柄径の加工などである。

これらのほとんどは原寸図や治具使用によって解決のできる事柄であるが、熟練した手加工技術が必要になることはいうまでもない。又、長期の使用に耐えるよう中央部の貫3本と下部3段の背板を除き、接合部にはナラ材丸棒を使用したピンでとめたり、網代文様よりテープのズレの少ない市松文様で座面を編みこんでいる。

現在までに7種28点の製品と様々な治具が完成し、業界移転へ向けて準備中である。来年度は、ダイニングテーブルとロッキングチェアと小物を試作する予定である。

なお、本研究はラ・サール学園修道士の藤上知弘氏の援助に負うところが大きい。氏に深く謝意を表す。

参考文献

- ・ John Kassay, The Book of Shaker Furniture
- ・ Robert F.W. Meader, Illustrated Guide to Shaker Furniture
- ・ Edward Deming Andrews and Faith Andrews, Shaker Furniture
- ・ Thos. Moser, How to build Shaker Furniture
- ・ John G. Shea, The American Shakers and Their Furniture
- ・ Edward Deming Andrews and Faith Andrews, Religion in Wood
- ・ 鹿児島出版会、スペースデザイン